

## 1 作品の概要, 書誌など

日本の革命運動を裏切って刑務所から出た小説家・高木高吉が主人公。彼が書こうとする小説のアイデア断片と、彼の日常とが交錯する作。これまで、「失敗作」(満田郁夫『中野重治論』新生社, 1968, p. 214)などと不当に低く評価されてきた;《←研究者が作品の善し悪しを評価するのは、本来おかしいのだが...》

1936年1月『改造』に掲載(↓2で二・二六事件を参照する先行研究が出るが、それより前の作)。翌1937年1月、同題で竹村書房より刊(併載は、「村の家」「一つの小さい記録」「同窓会」を含む計11編)。

新しい『中野重治全集』(筑摩書房)では、1996年刊第2巻のpp. 133-152に収録。

講談社文芸文庫『村の家 おじさんの話 歌のわかれ』(1994年)にもpp. 85-113に掲載。

## 2 主な先行研究とそれらへの違和感

下記の他、大学紀要・同人雑誌の類は未読。中野テーマの著作物も全てはチェックしていない。

杉野要吉「中野重治—「小説の書けぬ小説家」前後」(『国文学解釈と鑑賞』36-13<457>, 1971)

中野が「出獄後遅れて知った32年テーゼ路線に沿って、新しい再起への道に立っていた」と疑わずに前提。「二二六事件直前」など、およそ無意味な時代設定に基づき(サブタイトル中“前後”の“後”;著者中野がどうして“後”を予測できようか?),「屈折的な革命的ロマンティズム」を当該作品に見出すという、意味不明な立論。

森山重雄「中野重治(上)(下)—転向五部作—」(『日本文学』25-6, 7, 1976)

サブタイトルのように専論ではない。「小説の書けぬ...」については、(下)後半で議論。転向の中の非転向という矛盾が書く根拠を失わせたとするが、作者と主人公とを混同しているのでは。作中のエピソードでは徳田政右衛門一族と田川父子のみをとりあげ、各々の理由で(作者と葛藤の生じない庶民であること、モデルである西田信春が執筆時点で消息不明+検閲を怖れて)書き切れなかったとするが、これも同上の混同では。

島田明男「中野重治論—中野における「天皇制」問題・序論—」(『日本文学』34-1, 1985)

これも転向問題が主題。「小説の書けぬ...」についてはモデル探しを中心。そこから作者を取り巻く「6つの問題」を導くが、恣意的で妥当性に乏しいのでは。サブタイトルの「天皇制」問題は、32年テーゼの「天皇制打倒」を参照して高吉はそれを言っていない、とするのみで、当該作に関しては議論にさえなっていないのでは。

金子博「「小説の書けぬ小説家」論」(『国文学解釈と鑑賞』51-7<661>, 1986)

主人公の高吉を、マルクス主義を放棄していない、「そろばんずく」(作中の表現)の転向をした「革命的知識人」と定位。作中の漱石論、生物学者、「友だちの細君のドイツ人」、セザンヌの絵など、一部の文言にのみ反応。とはいえ、「彼の属する組織の弱さや醜さ」を高吉が自覚している、という指摘は傾聴すべきか。

島崎市誠『論集 中野重治』(龍書房, 2008)

これも「転向五部作」論で、「小説の書けぬ...」については3頁余り(pp.86ff.)。「村の家」までと比べて「分かりにくい」と位置づけ、その理由を作者が「直接経験した事実」ではないものを書く為、独白が多くなったからで、後の『空想家とシナリオ』のように「文学的リアリティー」をもって描けなかった、とする。

李正旭「中野重治の転向以後の自己認識をめぐって—「小説の書けぬ小説家」」(『文学研究論集』27, 2009)

主人公が書けなかった題材として、「自叙伝」および「人口問題、失業問題、戦争問題」を考察。各エピソードの検討に、やはりモデル探しが入る(小林多喜二、西田信春ほか)。「村の家」と対照させて考察するなど、疑問を感じずる立論もあるが、生物学者とロシヤ人の大先生とのエピソードをほぼ唯一評価していることは参考になるかも。

金ヨロン「治安維持法体制下における中野重治の転向五部作と伏字問題—「小説の書けぬ小説家」を中心に—」(『日本文学』64-11, 2015)

先行研究を批判的に回顧し、本作を「同時期の創作を総括するような重要な小説テキスト」と定位。当時の治安維持法体制を参照しつつ、高吉にとって検閲と伏せ字が大きな問題だったとし、同作を、伏せ字を最小限にしようと試みた小説であったと結ぶ。

小括；先に1で掲げた満田郁夫『中野重治論』辺りから始まる「転向小説五部作」という捉え方を継承する研究がほとんどだが、第1, 2作とされる「第一章」「鈴木 都山 八十島」で主人公の転向が描かれないことをどう考える？；⇒むしろ中野の“転向”を問題とするなら、佐野学の転向経緯と比較すべきではないか；《←既に吉本隆明がやっているが、もう少し細かな検討が必要では？；↳『佐野学著作集』vol.1》

第3作とされる「村の家」(1935.5)と第4作とされる「一つの小さい記録」(1936.1)との間に位置する「同窓会」(1935.10)では福井の中学校の東京での同窓会が描かれ、出てきた人物が「宮様」とか「首相」とか関係する設定；⇒「一つの小さい記録」とそれに続く「小説の書けぬ小説家」は、「村の家」からの連作ではないのでは？

1で書いたように、本作の手法上の特徴は高吉が書こうとして形をなさない個々のエピソードを彼の日常と併記している所にあるが、上記の先行研究では自分が関心を持ったりモデルを探せたりする(西田信春など)エピソードを、つまみ食いしているだけ。また上記のように、作者と主人公との混同も目立つ。

とはいえ、党への疑念を云う金子1986論文、生物学者とロシヤ人の大先生とのエピソードに留意する李2009論文、本作を同時期において重要作とする金2015論文などは参考にすべきかも。もちろん、作者である中野が、作中にも出る(全集p.151) 32年テーゼをどう考えていたかには興味があるものの、杉野1971論文のように当該テーゼ路線に沿おうとしていたと前提するのは論外。以下これらを起点とする。

### 3 「小説を書けぬ小説家」において、主人公(高木高吉)が書こうとしたエピソード群

以下、エピソード群を○で、主人公を巡る日常描写(一種の地の文)をタブ設定で、順に列挙する。

「プロレタリア作家」である高木高吉が書こうとしている「がまぐちの一生」の締切が、明日であること。彼はもと詩人で、小説家に転じたが傑作はなかった。刑務所から出た人間なので5年間は選挙権がなく、雑誌編集者に伏せ字が多い、こんな人物の為に発禁になっては困る、と思われていた(全集2<以下同>, pp.133ff.)。

彼は今の支配者に妥協しているが、どう妥協しているか書きたかった。彼の裏切りを書きたいと思った。検閲のことも考えた。彼は、国体が悪いと考えて革命運動に入ったのではなかった(pp.135f.)。

○ 高吉の蔵書で筋を引いた箇所の引用(pp.136f.)；メンシェヴィキの特権は大量に出版できること、多くの著者と出版屋を持っていることだったが、ボリシェヴィキには両方欠けていた。メンシェヴィキやカデットには合法だったことも、ボリシェヴィキには厳禁されていた。ロシヤ第一革命についてもメンシェヴィキ的な入門書があっただけで、「プロレタリアートと農民との独裁」公式も、非マルクス主義的な戯言と片づけられていた。検閲は、カデット、社会民主主義者、ボリシェヴィキそれぞれに差別意識が異なっていた；《←カデット；立憲民主党 Constitutional Democratic Party》

高吉は社会民主主義者でもボリシェヴィクでもないが、裏切り者にこの筋を引いた文章はこたえた。「わたし、いま、わかります」と声を出し、貧弱な「自叙伝」をほうり出した(p.137)。

彼は種探しを始めた。妹の歯槽膿漏、女房の肺尖カタルで金が必要なこと、それより良い家、美食への憧れ、欲しい本、旅行など。ある雑誌に次のような文言を見つけた。

○「新しい作家グループの一人」が書いていた内容とそれへの反発(pp. 137f.) ; かくある必然とかくあるべく必然との統一が、われわれ文学者の今日の苦痛である。それは作家と画家の仕事を比べれば分かる。画家はかくあるものを描けばよく、かくあるべき必然は問題にならない。しかし、画家と違った作家の苦痛に、作家の栄光もある。

高吉は軽蔑を感じ、突然古本屋に走って前に見た色刷りのセザンヌを買った。高吉は「のぼせるような気組」で「徳田政右衛門の話」を書き始めながら、その文学者を辱めるほどやっつける絵描きが出て来ないかと思い、その絵描きの言葉を想像した。

○徳田政右衛門一族の話(pp. 138-142) ; 徳田政右衛門は高吉の親類でもと百姓だった。ばあさん(母親)が自殺した頃、政右衛門は請負師だったが成功せず、田地が無くなった。政右衛門の子供は8人いたが5人が肺病で死に、政右衛門夫婦は家屋敷を売って東京に出た。夫婦は亀戸天神前でお茶屋を、長男は自転車屋、四男は柔道を習い始め、姉娘は店を手伝い、妹娘は百貨店に出た(p. 138)。

長男政太郎についてと、妹娘の結婚など。妹娘が結婚した養子は年中姑といがみ合い、夫婦で家出した時に養子が財産全部を書き換えていた。ばあさん(政右衛門の妻か)が高吉の父に頼んで金を又貸ししてもらい、田圃を買い戻したこともあった。

高吉の所へ政右衛門が来た時、海苔缶をみやげで出しながら、商売がうまくいかない話をした。高吉が四男について聞くと、柔道をやって警視庁から政友会の人付き人になって、戦争になってからは上海に行った、などという話だった。

高吉はそれきり政右衛門に会わなかったが、父からの手紙で四男が死んだから見舞いに行けというので、亀戸に行って「越前屋」を訪ねた(ここまでp. 139)。

店は思ったより貧弱で、政右衛門は酒を出してきた。自転車屋の政太郎が挨拶し、在郷軍人会の理事などという名刺を出した。彼は最初の妻ととっくに別れ、今は三番目だという。(先行研究で注目される)「人間の道だけは踏みはずさぬ」云々と語り、政右衛門に諫められる。彼は顔役みたいなものであるらしかった。

四男の隊で出した記念写真帖など遺品を見せられ、好きなものを持って行ってくれと言われた(ここまでp. 140)。

高吉は、政右衛門の妻が「高木のおとつつあん」に口をきいてもらって、田舎へ帰りたいたいと言っていたことを思い出し、そう書いた。

民蔵(四男)は上海から帰った後で再度警視庁に入り、養子口が見つかった。相手は郷里の遠縁で、汽車で出かけて吹雪の晩に貧しい式をあげた。その後発熱し、東京に戻って肺壞疽と診断され、警察病院に入院して死んだ。

高吉は政太郎(長男)、民蔵について、政右衛門についても思い出した。政右衛門は日露戦争で指1本なくして廃兵となったので、汽車にただで乗れることを自慢していた(ここまでp. 141)。

その後、政右衛門夫婦は東京を逃げた。《高吉が書きたいのは人口問題あるいは失業問題だ、という一種の地の文が1文あり》民蔵が失業したものの、上海に出征できて政右衛門はほっとした。高吉がもってきた遺品は、銅貨の他に抗日救国義勇軍...の胸章だった。《高吉は「戦争がかもし出した問題」を書きたいが、戦争自身は彼には書けないという1文の後》一昨年大演習のあった郷里の村の話、ダンスホールに通う士官と長時間水を飲まない演習をする兵卒、という聞いてきた二等兵の話を、高吉は書き加えた(以上、p. 142)。

(以下、同じ段落だが)書き進んでやめたが、高吉にとって検閲はどうでもよくなった。「ただ死んだり殺されたりすることが恐ろしかった」(p.142)。先の絵描き云々の文学者も、好意が持てないが、理由があった発言かもしれないと思うようになった。

○ 田川愛子と田川英太郎・英助父子の話 (pp. 142ff.) ; 田川英太郎の孫という田川愛子が訪れてきた。英太郎の一人息子である英助は、高吉のどの知り合いとも違っていた。馬のように頑強で、大学では哲学を出て、国鉄の組合で働いた。奈良で入営し、その頃の全国的検挙ではまぬかれたが、その次の検挙で逮捕された。除隊した時と保釈された時の2回、高吉の所へ来たが、それから1年半ほどで隠れた。

彼は神経質ではなく、非常な勉強家だった。剽悍であると同時に大様で何ともいえぬところがあった。田川のような男が自分の所にやってくる理由は分からなかったが、高吉はうれしかった。

一度、北九州でつかまったという知らせが来たが、そうではなかった。その後、父親の田川英太郎から、英助の消息を尋ねる手紙が来た。手紙には、自分は村の名誉職も辞しているが、生死だけでも知らせて欲しいなどと書いてあり、高吉はありのままを返事した。

田川愛子によれば、殺されたという話もあったがそうではないらしい、おばあさんは英助がロシアで大学に行っているものだと仏壇に蜜柑をあげたりしている、などと述べた。

田川の姪に当たるこの田川愛子は、名古屋郵便局の事務員であげられて執行猶予中だったが、北海道の姉のところへ就職口を探しに行く途中でおりて、高吉の所に寄った。その大きな手と指の爪のことなど。

田川の従兄弟に当たる津田が、まだ未決にいた。高吉はそこで1年ほど隣り合わせだった。津田は砲兵工廠の職工で、妹のステが十条の火工廠に勤めていた。彼女は美人で、共産党の妹といわれることに怒っていたが、工場を辞めて台湾に嫁に行った。高吉は田川英太郎にも会ったことがあった。

(以下、同じ段落だが、エピソードから少し離れるので) 高吉はこの一族を書こうと思って書き出したが、都合の悪いことがあって書けなかった。十条の工場、ステの嫁入り先、田川愛子については就職口のため、など。田川が生きていて捕まっていないことは、ちよくちよくやってくる所轄署の係から聞いたので、その男のために。また竹内が殺されたのを女房のオトリが役人をごまかして高吉に知らせた所、それをある男が小説に書いたことによって面会手続きが面倒になったので。《←などと色々とエクスキューズして、先行研究の一部ではそれを真に受けているが、実際には先のようにエピソードとして書いていることに留意》

○ 工場について書こうと思っての回想と牧場と家畜についての空想 (pp. 145f.) ; (直前の段落で十条の工場に触れたことからの連想か) 「わりに知っていたたばこ工場」について。女工たちが赤ん坊をおぶって休むなどして、平気で仕事をしているのに驚いたこと(その前に、巻たばこを作る自動装置を横浜の博覧会で見て、首切られた人間のことを痛ましいと思っていたので)。製紙工場を見学した時の回想。機械仕掛けに比べて労働者が少ないこと。高吉に説明してくれた工場の男が、石臼の中で原料をどろどろにする機械を「アジテーター」と呼ぶと言ったこと、など。《⇒以下、一文のみ地の文; 高吉は、タイムレコーダーを押したことのない自分は工場のことを書けないと思ひ込み、「がまぐちの一生」に戻ろうとする; ⇒次段落へ》

牧場についての「空想」へ続く。牧場にいる牛、馬、豚、とかげ、彼らはやがて屠られ、肉が食われた後、皮が皮革工場へ。問屋、デパート、客、掏摸や泥棒を経て、がまぐちは溝へ捨てられ、また拾われる。全ての皮は兄弟で、切れ目という「もの」はない云々 ; 《←この短い段落が、おそらく「がまぐちの一生」のテーマなのであろう》

高吉からすると「がまぐちの一生」が「吾輩は猫である」の千倍も輝かしいものに思えたことから、漱石の愛読者や弟子、注釈者を、ドイツの軍曹並だと罵倒(p.146)。《←先行研究中に中野が漱石を罵倒しているように誤読しているものがあるが、罵倒されているのは漱石の読者や弟子たちで、罵倒している主体は高吉》

「がまぐち」が進まないの、金持ちの友達の家に泊りにいくと、下から女中の電話が聞こえる。夕飯にライスカレーを出すので、(材料を求めて?) 電話していたと分かる。高吉はライスカレーを食べぬ気分、自分の部屋へ戻った。その後も「がまぐち」に行ったり「自叙伝」に戻ったりした(p.147)。

高吉の女房オトリが妊娠したこと、自然流産が危険なので、人工流産にしなければならなかったこと、手術が終わり、医者には手術料をまけてくれるように頼んだが、看護婦には払わねばならないこと。他に、買いたい本(ロシア語の字引など)、必要な旅費など(朝鮮が「のぞみの地」であること)、など(pp.147f.)。

威勢をつけたくて永井荷風、鷗外、やくざな新進作家を読む。元気づけられたことに自己嫌悪(pp.148f.)。

雨戸をあけて部屋から見えた風景(もやし屋のばあさん、子供、病院、風呂屋、練兵場、隣の兵器研究所の「お嬢さん」etc.)

昼間に目覚めて、便所で通俗雑誌を読む。隣の便所の音が聞こえることから、友達の細君のドイツ人の小便の音が聞こえた時、国辱を感じたことの回想へ。便所で読んだ通俗雑誌に載るソ連関係の記事へ(pp.149 f.); 《⇒このソ連関係の雑誌記事の話から、次の生物学者のエピソードに続く》

○ ある生物学者の随筆に出るソヴェート・ロシアの大先生の話(p150) ; 高吉が読んだ、生物学者による随筆「老先生の思い出」を巡る話。彼はうまい随筆を書いていて、高吉は好んでいた。この生物学者がソヴェート・ロシアに行き、ある老人の大先生についての時のこと。大先生は将棋が道楽で、日本の弟子に教えようとした。弟子は駒みちがのみこめず、家族が教えても無駄だとたしなめたが、大先生は「彼はわかるんだよ。彼は生物学者なんだ」と答えた。カギ括弧でロシア語も ; Он понимает, потому что (On ponimayet, potomu chto) ←何故ならば、彼には分かる、の意味 《← “彼は生物学者なんだ”, の意味はこのロシア語に無い》

このロシア語を読み、さらに音読して、便所で高吉は突然泣き出した;《←日本語とロシア語、それぞれ後半の意味が違っているので、そこに何らかの暗号的な含意があるのかどうか〜ともあれ、ここは次のエピソードにすぐ繋がる点でも、作品の最重要箇所の一つであろう》

○ T博士、竹内に触れる渡辺への語り (pp. 150ff.) ; T博士からの連絡で彼に会ったら、渡辺からの2通の手紙を見せられる。いくら円が安いからといって、海苔缶(に金を入れて?)送ってくれとは虫が良すぎる。渡辺とは中学が同じで互いに軽蔑しあっていたが、東京で運動で再び遭遇した。高吉曰く、「おれはあやまって出てきた」、渡辺はそれを軽蔑するかもしれないが、それを自分は卑下しない。自分は出獄して32年テーゼを読んだが、「異議なし」と対応したのでは話にならない。円が安いからといってTに金送れと言っているのは、(渡辺の)仕事が失敗しているということ。日本で竹内の年譜が出たことに、高吉は反対した。渡辺には、日本に帰ってくるな、健康だけは祈る、云々と書き飛ばす。

高吉が思い出した昔話。ヘルヴェーク\*が年金をもらったとフライリヒラート\*を詩であざけたところ、フライリヒラートは年金をプロシヤ王に返し、1848年革命で最も重要なドイツの革命詩人として現れたことの回想、など;《\* G.Herwehk 1817-1875, \* F.Freirigrath 1810-1876, ともにドイツの詩人》

#### 4 考察 — 「オン・パニマーエット(彼はわかるんだよ)」の背景—

サブタイトルにあげた点を含む以下3点について、考察する。

○ 「がまぐちの一生」は何の隠喩か ; 何かの隠喩とは思われるが、明確ではない。そこが本作の難点といえ難点。おそらく、先のエピソード列挙では、(途中に1文だけタイムレコーダー云々という、いわば地の文が入るが) 工場⇒がまぐち、と繋がっていて、この2段落が多分解答なのだろう。

↳ 工場の高吉が思っていたより良さげな光景+人間の為に飼われる家畜の描写は、高吉が転向したものの本来的には抵抗するプロレタリア作家、として書くことを期待されている小説、という意味か? であるとすれば、あえて詰まらなそうな物語およびタイトルにされていることには、意味があるのでは ; ←とはいえ、漱石の「猫」と対比させて高吉が称揚しようとした理由は不明(or 両極を往来している?)。

「徳田政右衛門の話」はこれとどう関係するのか？；政右衛門の家は田圃持ち(自作農)だったし、東京に出てからは政右衛門も長男(政太郎)も自営業だった。四男(民蔵)は軍人で警察官だった。いずれも、プロレタリアートではない一家。本作のエピソードでこれが一番長いことは、中野がこちらの方に「がまぐちの一生」より高い価値を認めている、つまりプロレタリア文芸以外のものを書こうとしている、という意思表示では。

○ 32年テーゼを含む、党やかつての同志(田川英助、竹内、渡辺ら)に対する高吉の態度；

32年テーゼについて；テーゼそのものではなく、それを無批判に受け入れてしまう組織を、明らかに冷笑的に見ているだろう(p. 151)。

田川英助について；友人として尊敬できる存在、家族も同上。この時点で生死不明であったので、(森山論文と逆に、作者である中野が検閲を怖れずに書けると云う意味で)かつての同志の中ではモデルにするには都合が良い存在だった、ということでは。

竹内について；殺されたことのみ注視；⇒殺されるのは怖い(p. 142)、と高吉が云う時に念頭にあるだろう。作品の評価は無し～むしろ、その年譜が出たことに否定的なので(p. 151)、高吉はその作品を評価していない、という設定では；←あるいは、(作者である中野の)検閲者へのポーズか。

渡辺について；中学校の時に互いに軽蔑し合っていた、とされる。今も軽蔑か。渡辺はおそらく支那に逃げていて、党の職責を果たそうとしているのか。日本の知り合い(T博士)に金を無心するように、それがうまくいっていないという描写に、駄目な党人像。つまり、高吉が党を否定的に捉えていることが表出しているのでは；←あるいはこれも、検閲者へのポーズかもしれないが。

主人公の同志への不信感・違和感は、本作より一つ前の「一つの小さい記録」でより顕在的では。

なお、プチブル(小市民)的な生活?への憧れが2箇所語られる；⇒p. 137「...精のつくものをむさぼり食い」「読みたい本はふんだんに買って読みたい」「旅行にも出たかつたし飛行機にも乗りたかつた」、およびp. 148「ロシア語の字引も『大日本歌謡集成』も買ったかつた」「朝鮮へ行く旅費もつくりたかつた」。

○ ロシア語とその後の号泣が、作品全体のキーでは；彼は理解している(On ponimayet)、の“on”(彼)は3人称男性単数なので、高吉自身以外の可能性は無いのでは。

p. 137で一度(蔵書に引いた線の文章を読んだ後)、「わたし、いま、わかります。」と高吉が語っていた；⇒この箇所では検閲が人を見ていることを理解する、の意味であろう。であるなら....；

⇒生物学者と大先生のエピソードに想起されて“彼”(高吉)が理解している(On ponimayet)のも、検閲と関係するのでは？；～先行研究では金 2015 論文が最も示唆的では？

{ 検閲に配慮して、<国家権力に>迎合する小説を書こうとするエクスキューズの数々 }

出獄して5年間公民権のない立場、妹や妻の治療費、出版界での自分の評判(傑作が無い、伏せ字が多いことなど)、美食や旅行への願望、欲しいものを買いたい、竹内のように殺されたくない、32年テーゼに従う党人への嫌悪、プロレタリアートではない徳田政右衛門一族の小説構想 etc.

{ 一方で、同志に配慮したような表現も見られる }

「がまぐちの一生」という、書こうとする小説のタイトル(被抑圧者を主人公に?)、革命詩人フライリヒラーのようにありたい、支那(?)に逃げている渡辺を批判 etc.

Он понимает(On ponimayet)；⇒同志と検閲者との股裂き状態(検閲に迎合することのエクスキューズ、かつ同志にもエクスキューズ)である自分を